

瀧谷山報

通巻 181号
[令和6年1月発行]



【今後の当山行事予定】

初不動大法会 1月28日(日)

●御本尊御開扉大護摩供【本堂】

〈午前〉6時・9時30分・10時30分・11時30分
〈午後〉1時30分・3時

●大般若転読付大護摩供【本堂】

午前11時30分

●滝不動堂護摩供【滝不動堂】

午前9時頃～午後3時頃まで

(時刻は滝不動堂山伏に直接お尋ねください)

節分会 2月3日(土)

●開運福豆まき式【法楽殿前特設会場】

〈第1回〉午前11時〈第2回〉午後0時〈第3回〉午後2時

●厄除大祈願祭【本堂】

〈午前〉7時・9時30分・10時30分・11時30分
〈午後〉1時30分・3時・5時

●如意宝珠のお授け【客殿内特設会場】

午前9時～午後4時

花まつり 3月28日～4月8日

●灌仏供養(甘茶かけ)【寺務所】

午前9時頃～午後4時頃

日々の お護摩祈祷

- 平日 … 〈午前〉7時・10時・11時30分
- 土・日・祝 … 〈午前〉7時・10時・11時30分 〈午後〉1時30分・3時
- 仏具磨きの日 … 1月25日・2月26日・3月25日・4月25日は
午前7時の朝護摩のみとなります。

迎春期間 (2月15日まで)

- 平日・土・祝 … 〈午前〉7時・10時・11時30分 〈午後〉1時30分・3時
- 日曜日 … 〈午前〉7時・9時30分・10時30分・11時30分 〈午後〉1時30分・3時

交通安全祈願 (車のご祈祷)

午前9時より午後4時(毎時0分・30分よりご祈祷いたします。少し早めに寺務所にてお申し込みください)
※毎月28日および1月31日～2月4日は交通安全のご祈祷はありません。

毎月28日

- 御本尊御開扉大護摩供 … 〈午前〉6時・10時・11時30分
〈午後〉1時30分・3時
- 滝不動堂護摩供・宝剣加持 … 午前9時頃～午後2時頃
(滝不動堂にて山伏にお尋ねください)

行事の予定は変更になる場合がございます。
詳しくは瀧谷山公式ホームページにて随時
ご案内いたしますので、来山前に今一度
ご確認ください。



瀧谷山公式ホームページ



Instagram

令和6年1月発行
通巻181号

●発行所：瀧谷不動明王寺 〒584-0058 富田林市^{オナキ}彼方 1762 電話 0721-34-0028 振替 00930-5-17704
●発行人：荒谷純光 ●編集人：津田貴司

昨秋、とある運動会に招かれた。各地の運動会がコロナ禍を理由に実施されなかったように、その運動会も四年ぶりによく再開された。運動会といえば、万国の旗が会場にはりめぐらされ、あちこちではお弁当を広げて観戦を楽しむ光景が思い浮かぶ。

但し、その運動会には開催を知らせる看板も無ければ、さしたる華やかな演出も施されていない、実につつましい運動会なのである。そのつましやかの一因は、そこが日本国内の刑事施設、すなわち刑務所であることによる。

今回の競技種目は五つ、その中に「玉入れ」があった。さほど高くもない2メートルばかりの位置に提げられたカゴにお手玉を投げ入れて競うお馴染みの一戦である。

なお件の運動会における玉入れ競技には参加条件が付されていた。それは六十五歳以上であるということ。高齢化社会の構図はそのまま堀の内側にも当てはまる。競技参加に集ってくる被収容者たちの足取りが、その加齢具合を如実に物語っている。だが高齢者とはいえ、いざ競技開始の号砲が鳴れば、精一杯に玉入れの動作に没頭する。誰もが両手に玉を取っては投げ、拾っては投げる。この一見単純な所作の繰り返しを遠目に見ながら、いくつかの感慨を抱いた。

読者諸氏の多くは、玉入れに参じた経験を若き日の思い出と重ねるであろうか。小学校低学年の種目であったと記

憶する人もおられるに違いない。カゴに入りそびれた玉に当たってもさして痛くもなく、大歓声に包まれての競技は興奮し、爽快なことであった。その玉入れに今や高齢者となった者たちが、何の因果か興じている。聞けば今回の最高齢参加者は八十九歳という。ずいぶんと昔にこの競技から遠ざかった者が、再びこの歳になって玉入れをすることになった、その対比加減が感慨を呼んだのである。そこには平常と非常、幸福と悲哀、悔恨など多種多様な思いが混沌とした色となって見えるようであった。

宙に舞う玉を見つつ、あの紅白の二色はいったい何を表わしているのだろうかと思った。数ある色の中から紅白が扱われた理由はどこにあるのかと想像がふくらむ。

あらためて気づくのは「あか」が「赤」ではなく「紅」であること。日頃から祝いの水引きやのし紙、餅に饅頭、幕の類いまで表記は紅白と定められている。確か日の丸の旗も「地は白色、日章は紅色」と法令規定されていることも同意である。白が聖なる清浄さの象徴とすれば、紅の本意を少しばかり探りたくなる。まずは紅白の連想へと誘う短歌をあげて参考としたい。

梅の花 うすくれなるに ひろがりし
その中心にて もの榮ゆるらし

斎藤茂吉晩年の一首である。白梅が咲き誇っている。ほとんどの人はその白さに目がゆくが、茂吉はその花蕊をじっと見つめている。梅の萼（うてな）はほのかに赤く、黄色のめしべとあいまって、単色ではない彩りが息づいている。その花の色合いに大いなる生命力を感じとっている。茂吉はこの「うすくれなる」がお気に入り、何首にもこの言葉が登場する。

紅梅の花にふりおけるあわ雪は
水をふくみて 解けそめにけり

茂吉と同じアララギ派の島本赤彦の一首。こちらは紅梅、春先に降った淡雪の白さが梅の花色と重なり、やわらかな情景を生んでいる。紅い梅の花のみでもうつくしいが、さらに透き通るような雪が交じり合うと、一段と趣きが増す。その自然美を素直に観察し謳いあげている、これも茂吉が感得した境地に通じるかもしれない。

ふたつの歌から読み取れるのは、紅と白が大自然の力強さと清らかさを表わしていること。人と自然が隔てなく接すると、ある種の感動や幸福感に包まれることを暗示しているようである。

もうひとつ別の視点から。天然原料による染色の分野で

は、アカネ（茜）が広く知られる。この多年生植物は日本にも自生し、東アジア一帯にも分布する、その根を煮出すと濃厚な茜色が採れる。万葉集にも登場するこの鮮やかな茜色は、紅色の一起源とも言われるほど重要な色に相違ない。「あかねさす」は日、昼、照る、月など光輝くものを修飾する枕詞でもある。

茜色に似た色として、密教が伝承する「紅頗梨阿弥陀如来」についても触れておきたい。その名は御姿全身が「紅頗梨色」と呼ばれる深紅の色をなしていることに由来する。その深紅さはすべての衆生を救済せんとされる阿弥陀さまの大慈悲心の顕現、西方極楽浄土の大光明に他ならない。これは茂吉らが感じ得た「くれなる」、大自然の力強さ、生命力の美しさと気脈を通じるかもしれない。

先人たちが、紅白の意味をどのように実感していたかは推測の域を出ない。とはいえ、おのれが宿す生命力が、この清らかな大地で花開き、利他の行いに勤しめば、自他ともに円満な暮らしが実現する。そうした人生こそを寿ぐために用意してくれたのが、この紅白二色と思うことは許されてもよからうか。

新しい年が明けた。ほどなくして梅の花も咲くことだろう。あの運動会での彼らも、これから玉入れをする子供らもおとなたちも、みんな幸せの花を咲かすため、功德を積む玉入れをしてほしいと願う年頭である。

初不動大法会

大般若経転読付
大護摩供 厳修

一月二十八(日)

令和六年二月二十八日(日)、
御本尊御開扉のもと、初不動
大法会をおつとめいたします。

午前十一時三十分より本堂
にて、世界和平・萬民豊樂を祈
念する大般若経転読付大護摩
供を厳修し、あわせてご信徒み
なさまの所願成就を祈願いた
します。

また滝不動堂では、滝峰大護
摩講山伏による護摩供ならび
に宝剣加持がつとめられます。

新しい年の最初のご縁日、初
不動大法会にご参詣くださいま
すよう、ご案内申し上げます。

【大般若経転読付大護摩供】

●午前十一時三十分より

●ご祈祷料…五千円より

【滝不動堂護摩供】

●午前九時頃～午後三時頃

(詳細は滝不動堂山伏に
お尋ねください)

●護摩木…一本三百円



護摩の炎

初不動大法会では、護摩壇の天蓋をも焦がす
ほどの勇壮な炎があがります。御本尊不動明
王の背後の炎は、仏教の守護神である迦楼羅^{カールラ}
の姿とされ、迦楼羅焰^{カールラエン}と呼ばれています。

大般若転読とは…

六百巻に及ぶ『大般若経』を大勢の僧侶が読
誦します。その際、蛇腹折りになった経本を大き
く宙に広げ、高い位置から頁を一気に繰り落と
すようにする所作が目を引き、このとき生じる風
を受けると長寿になる、厄除けになるともいわれ
ています。また読み終えた経本を机に叩きつけ
るようにする大きな音も特徴的で、非常に勇壮
な読経であり、普段にもましてダイナミックで荘
嚴な護摩供であると言えます。



節分会 (せつぶんえ)

二月三日(土)



◆令和6年厄年早見表(年齢は数え年)

男 性			女 性		
平成 12 年生まれ	25才	厄 年	19才	平成 18 年生まれ	
昭和 59 年生まれ	41才	前厄年	32才	平成 5 年生まれ	
昭和 58 年生まれ	42才	本厄年	33才	平成 4 年生まれ	
昭和 57 年生まれ	43才	後厄年	34才	平成 3 年生まれ	
昭和 39 年生まれ	61才	厄 年	37才	昭和 63 年生まれ	
			61才	昭和 39 年生まれ	

厄除大祈願祭

瀧谷山では、厄年を無事に過ごし、健やかに佳い日々をお過ごしただけですよう、日頃より厄除開運のご祈禱をおつとめしております。厄年は、身体的・精神的・社会的な節目となる年齢です。厄除けは本来、季節の変わり目である節分にするものとされておりますので、当山では、とくに二月三日は「節分会 厄除大祈願祭」として、お護摩の回数も多くおつとめいたします。どうぞこの機会にご参詣されますよう、ご案内申し上げます。

●場所：本堂

●ご祈禱時刻：

〈午前〉七時・九時三十分・

十時三十分・十一時三十分

〈午後〉一時三十分・三時・五時

●ご祈禱料：五千円より



開運福豆まき式出仕者募集

開運福豆まき式にご参加くださる出仕者も募集しております。年男・年女の当たり年に関わらず、どうぞご応募ください。

●日時：二月三日(土)

〈第一回〉午前十時集合

〈第二回〉午前十一時集合

〈第三回〉午後一時集合

●支具料(参加費)：二万円

●募集は各回三十名程度です。

年齢・性別・干支は問いません。

お問い合わせ・お申し込みは寺務所まで。



開運福豆まき式

二月三日、開運福豆まき式を執り行います。節分の行事は、立春の前に邪気を払って無病息災を祈り、新春を迎えるためのものです。豆は「魔滅」に通じるところから、豆まきには、旧年の魔を滅し、あたらしく福を招き入れるという意味が込められています。ご家族みなさまの今年一年の災難消除・開運招福をご祈願なさって、どうぞお参りください。

●場所：法楽殿前特設会場

●時間：

〈第一回〉午前十一時

〈第二回〉午後〇時

〈第三回〉午後二時

如意宝珠のお授け

二月三日節分の一日に限り、客殿内に特別に設えた会場にて、如意宝珠のお授けをいたします。

如意宝珠は、真言宗最極の秘物であり、瀧谷山でも平素より秘して大切に祀りしております。弘法大師さまは、如意宝珠を「自然道理（じねん）如来（らい）の分身（ぶんしん）なり」と説かれており、所願を意の如くに叶える慈悲の心に満ちた如来のお身体そのものであるとされております。（さらに詳しくは11ページをご覧ください）

如意宝珠のお授けを受けられた方には如意宝珠守をお渡しいたしますので、各々身につけて大切にお持ちください。

●会場：客殿内特設会場

●時間：午前九時～午後四時

●如意宝珠のお授けは、如意宝珠守一体につき、千円のご志納をお願いいたします。



開運福豆・新春縁起物のご案内

当山では毎年一月中旬より二月三日節分まで、開運福豆をお分けしております。節分のおさがりとして、どうぞお早めにお召し上がりください。

また迎春期間中（二月十五日まで）、矢守や熊手、えとみくじ等の新春の縁起物をお授けしております。家内安全や竈の守護を祈念し、一陽来復のこの季節にあたらしくお祀りして、新春をお迎えください。

開運福豆

●授与期間：

一月中旬～

二月三日

●志納料：

一袋

二百五十円



開運福豆

縁起物（矢守・熊手・えとみくじ）

●授与期間：迎春期間（二月十五日まで）

星まつり祈禱のご案内

「星まつり祈禱」は、九曜星を供養し、厄災を除き福運を招くお預かりのご祈禱です。当山では、二月三日節分の夕刻五時におつとめしております。

年齢や当星に関わらず、ご家族みなさまの厄除開運や無病息災を祈念し、一年の平穏と開運招福をご祈願なさってください。

●ご祈禱料：一体千円

●締切：一月二十日

●お申し込みは、同封の用紙にご記入の上、寺務所までお持ちいただくか、ご郵送ください。

●お札のお渡しは二月五日以降になります。お受け取りの方は直接寺務所までお越しください。郵送ご希望の方は二月十日以降に順次お送りいたします。



星まつりのお札

◆令和6年九曜星早見表（数字は数え年）

●羅喉星	○土曜星	○水曜星	●金曜星	○日曜星	●火曜星	●計都星	○月曜星	○木曜星
大凶	半吉	大吉	末吉	大吉	大凶	大凶	半吉	大吉
三碧	四緑	五黄	六白	七赤	八白	九紫	一白	二黒
1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31	32	33	34	35	36
37	38	39	40	41	42	43	44	45
46	47	48	49	50	51	52	53	54
55	56	57	58	59	60	61	62	63
64	65	66	67	68	69	70	71	72
73	74	75	76	77	78	79	80	81
82	83	84	85	86	87	88	89	90
91	92	93	94	95	96	97	98	99

厄年… 前厄年・後厄年…

お寺のごはん

15 ゆり根と蓮根の鉄砲和え

ゆり根の出まわる時期、すこし気の張った和え物というときには、この鉄砲和えがおすすめです。辛子味噌で和えるだけの簡単なお料理ですが、辛子がツンとくるのと、ゆり根の甘く柔らかい食感と蓮根のシャッキリ感の対比が、なんとも乙なお料理です。

【材料】

- ゆり根
- 蓮根
- 白味噌
- 砂糖
- 塩
- 昆布出汁
- 辛子

【作り方】

- ゆり根は一枚ずつはがしてきれいに掃除し、大きすぎるときには半分くらいに切って湯がきます。
- 蓮根は1～2センチくらいの乱切りにし、一度お酢を入れた水にくぐらせてから湯がきます。
- 辛子はお湯でこねて辛味を立てておきます。
- すり鉢に白味噌と辛子を入れ、すりこぎで味噌と辛子をよくなじませてから砂糖と塩を入れ、お出汁で伸ばして味を調えます。ゆり根も蓮根も水分が出ない食材ですので、ぬたは少しゆるめにします。
- ゆり根と蓮根をぬたで和えてできあがりです。

思い起せば、昭和57年8月1日降り続いた雨は、夜入っても止むどころか、一大集中豪雨と化し、この地方一帯各所に、甚大な被害をもたらした。当山においても境内各所に、未曾有の大被害を蒙ったのである。しかしそれが判明したのは一夜明けてのこと、その夜はそれどころか、この谷一帯が、ごうごうたる水音と雨と風と、山津波の混乱極地の轟音のルツボの中を、なすすべもなく、恐怖と不安のうちに送ったのであった。

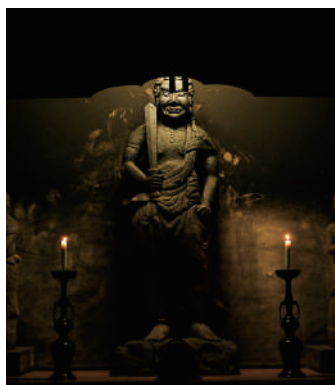
一夜明けてみれば、西の峠は両側の山崩れにより通行不能、納骨堂は裏の山崩れのために、五輪塔その他堂内のもので、すべてを、堂の裏から表にすっぽぬけに吹き飛ばされてしまった。しかし不思議にお堂は建っていた。最も甚大な被害は、瀧不動堂であった。お堂上の山の崩壊による土石流と、滝池の堤防決壊による洪水とが重なり、瀧不動堂は見る影もなく、姿を消してしまった。滝行場一帯は、2メートルに及ぶ土砂に埋まり、その上を谷川の水が勢いよく音を立てて走っていた。この日から

復旧作業が始まり、お不動さま探しが開始されたのである。

当時のお堂はブロック積み、鉄筋屋根瓦葺きであったので、一たまりもなく崩壊し、これらのものはその場所から見つかった。石の花立、燭台、香炉も大小二基等すべて、その位置から発見された。ところがいくら捜しても、何日たつても、お堂にお祀りされてあったお不動さまと、矜羯羅・制吒迦の両童子の三体の仏様が見つからない。谷川の水の流れている間は多少掘り起こしの作業もしやすいが、水の流れが無くなると、石や泥との悪戦苦闘である。お堂のあった場所は勿論ここぞと思われる箇所は、隅なく掘って、ただひたすらに捜しに捜した。下流いたる所を掘って捜しても何処にも見当たらず、ついには大和川下流、堺あたりの左岸に、それらしい石仏が上つて、仮にお祀りされてあると聞き、見に行つたが、これも駄目。滝附近の土砂は毎日トラックでその年の暮れまでかかって、やっと運び上げ、東の駐車場に山と積み上げられたのである。

不動堂再建計画も具体化し、現在地に地鎮祭を行ったのが、翌年の

五月、お不動さまはついに現れられず、仕方なく新しく造顕せざるを得ないこととなった。お堂建立の地域整備もほぼ終わったので、もう少し上流の方も、或る程度土砂を取り除いて川床を下げて置くこととなり、上流10メートルばかりの所まで掘り進んだところ、何かしらスコップに、コツと当たるものがある。そつと掘り出して見たところ何とそれは制吒迦童子ではないか。



続いてお不動さまも現れられ、出た！という叫び声と共に、山内に歓声が鳴り渡った。それは昭和58年6月15日の事であった。その日は正に、弘法大師ご生誕の日に当たるのであった。作業員の驚きも勿論、山内の喜び、何物にたとえようか。しかもその御尊体が、どこも何一

つ欠けたところもなし、折れたところもなし、お不動さまの剣もそのまま、指一本折れてもいない。そしてその三日後の18日には矜羯羅童子もお出ましになり、三体ともその通りのお姿で揃われたのである。

これは何たる不思議であらうか。ブロック造りのお堂は現地に倒れているのに、お不動さま御三体のみは、それより更に12〜3メートルも上流に、しかも1メートル余りの土砂の下に二年余りも埋もれたまま、無傷に出でこられたとは。何と考えても不思議という他はない。あの山津波と洪水との混乱の中で、何がどう作用してこうなったのか、それはわからない。ともかくも水害の最中で、潰れたお堂より上流で、三体揃って出られたことは、何としても不思議でならない。私たちは、いままさらのようにお不動さまの御靈光の照らしむるところと、有り難く受け止めざるを得ないのである。

昭和63年10月18日
先代・瀧谷山主 荒谷実善
(瀧谷山報通巻35号より転載)

如意宝珠について

節分会にてお授けしております如意宝珠とはどのようなものか、ここで改めて少し探ってみたいと思います。

如意宝珠とは「如意」意のまま(に願いを叶える)宝の玉のことです。インドの古語では「チンターマニ」と呼び、この響きに漢字を当てると「真多摩尼」となります。大抵、下は球状で、上は摘まんで引つ張つたように尖つていて、身近なものにたとえると玉葱のような形をしています。宝珠はお寺のいたるところにあります。たとえば本堂裏山にある多宝塔。塔の屋根の中央から天に向かって突き出した部分(＝相輪)の頂点には宝珠が据えられています。その外周にある手すりの柱にも宝珠の形をした飾りがあります。ただし、こちらは装飾・保護などを目的としたもので、それをあえて宝珠の形に似せて作っていることから擬宝珠と呼ばれます。このほかにもお堂や燈籠、蠟燭立て、香炉などの屋根や蓋の部分の頂点に宝珠が施されています。

宝珠を火焰で囲む意匠は実に普遍的です。瀧谷不動尊の御朱印は火焰で縁取られた宝珠の判を押しています。この宝珠の中心に、お不動さまを表すカンマンの種子があしらわれています。また、三宝荒神札にも火焰宝珠を見ることができま

す。こちらは火焰の中に三つの宝珠が配置されています。印判や図画などで見ると、燃え盛る炎のゆらめくような繊細な描写がいきいきとして、金属製の物とはまた違った趣を感じさせます。宝珠は仏さまの持ち物でもあり、瀧谷山の子安地藏さまも、右手に宝珠をのせています。

意のままに願いを叶えるー如意宝珠の功德や特徴を、弘法大師さまはこのように表現されました。「如意宝珠の形は大鼓の如くであり、そこから出づる光明は太陽のように目映く、十六由旬※をも照らす。華鬘や珠飾りなどで莊嚴した高い幢におけば、よく生きとし生けるものたちの願いを満足させる」(『秘密曼荼羅十住心論』)。このことは弘法大師さまよりもさらに古く、二世紀頃に著された『十住毘婆沙論』という仏教書にも説かれており、宝珠の効能として毒虫や疾病、苦痛などの災いをことごとく除き清めてくれることが述べられています。日本密教の歴史において、如意宝珠は「願いを叶える法具」という存在を超えて、仏さまのご遺骨(＝仏舍利)であり、ひいては仏さまそのものと等しく尊いものとして非常に重要視されてきたのです。

※由旬：古代インドにおける長さを表す単位・ヨージヤナのこと。一由旬は一説には十数キロとも言われる。

瀧谷山の四季⑦

暑さ寒さばかりに気を取られていると、温暖化が進んだせいかお彼岸を過ぎても暑く、かと思ふと急に冷え込んであっという間に冬が来て、もはや四季がなくなってしまうような感じがします。それでも自然の営みに注意を向けると、いつの間にかツバメは南へ帰り、モズが高いつちに止まってキチキチキチ…と鳴いているのが聞こえてきて、やがて紅葉が美しく山を彩り、朝の光はきれいに透き通って、季節はたゆむことなく移ろってゆくのがわかります。

立冬から春先まで、夜になると瀧谷山の裏山の本々や竹藪がざわざわと騒ぐことがあります。風は距離や方向を攪乱するようで、あらぬ方向から音が聞こえます。ざわめきの向こうに、かすかに遠く町の音が聴こえたり、フクロウの鳴き声がしたり。時には、か細いトラツグミの声が混じること。そうして風が騒ぐ夜に耳を傾けるうちに刻は過ぎてゆきます。このような何気ないことも冬ならではの風情です。茶人や俳人ではなくとも、自然の変化に眼差しを向け、そこから詩情のようなものを感じとることができれば、季節感に満ちた豊かな暮らしができるのかもしれませんね。

瀧谷山にお詣りの際には、ささやかな身の回りの自然に、ぜひ感覚を澄ませてみてください。